

申請4件(4名) 採択3件(3名)
旅費2.8万円・研究費21.0万円

B. 自由課題

申請27件(27名) 採択19件(19名)
旅費73.6万円・研究費67.6万円

研究会課題に関しては、公募に際し特に設定主題は提示されなかった。公募後、諸状況を所内で勘案の上、運営委員会の議を経て3主題を決定した。それら主題を予定された経費とともに列記すれば次のとおりである。

- 1. ニホンザルの現況 旅費15.5万円
- 2. 行動の観察方法と記述の客観化 旅費20.5万円
- 3. ホミニゼーション 旅費18.0万円

付 記

(1) 霊長類研究者連絡会の発足

本研究運営委員選出の母体として、昭和46年6月に霊長類研究連絡会が組織されたが、会則もなく、運営機構も不備であって、その機能を効果的に發揮するに至らなかった。そこで近藤所長は昭和47年11月20日の運営委員会に、この組織の名称を実体にふさわしく「霊長類研究者連絡会」と改め、機構を整えることを諮り、その意見に基いて、まず所内から選ばれた世話役(大沢済・河合雅雄・川村俊蔵・久保田鏡)に設立準備委員会の構成を委嘱した。設立準備委員には、霊長類研究連絡会員が互選の結果、糸魚川直祐、岩本光雄、江原昭善、大沢済、河合雅雄、川村俊蔵、久保田鏡、近藤四郎、田中利男、水原洋城(五十音順)の10氏が選ばれ、会規約の原案を作成、昭和48年3月17日プリマーテス研究会にひきつづいて開催された設立総会にその承認を求めた。設立準備委員会は総会で出された意見にもとづいてさらに原案に検討を加え、3月20日つぎの通り会規約が決定された。

3月31日現在会員数は140名である。

霊長類研究者連絡会規約

昭和48年3月20日作成

1. 本会は京都大学霊長類研究所(以下「霊長類研究所」という)の共同利用研究所としての活動性を高めるとともに、会員相互の連携を緊密にすることを目的とする。
2. 本会は霊長類を主たる研究対象とする研究者(大学・研究機関の研究者、大学院学生およびこれに相当する研究者)をもって構成する。
3. 本会の会員はつぎの権利と特典をもつ。
A 霊長類研究所運営委員を推挙する。
B 霊長類研究所年報の配布を受ける。
C 研究にかんする必要な情報の提供を受ける。
4. 本会の事務局は霊長類研究所におき、所長が会の代表としてこれを主宰する。
5. A 本会に入会するには、所定の用紙に必要事項を記入して事務局に提出し、会員としての登録確認を受ける必要がある。
B 事務局は2年ごとに会員にたいして、登録を継続する意志の有無を問い、名簿を更新する。

(2) 共同研究実行委員会

共同利用研究に関する運営委員会審議に要する参考資料のとりまとめ、ならびに共同研究の実行の円滑化をはかるために、所内に共同研究実行委員会が設けられた。昭和47年度委員会は、すでに前年度12月に発足(委員長:岩本光雄)したが、これと一部期を重ねる形で、昭和48年度委員会が47年11月に発足(委員長:久保田鏡)した。(岩本光雄)

2. 研 究 成 果

設定課題 1. ニホンザル地域個体群の研究

ニホンザルの個体群動態

増井 憲一(京大・理)

47年度は、昨年に引き続き高崎山と白山でポピュレーション・センサス等の調査をおこなった。また、ニホンザルの寿命についての検討を一部試みた。

高崎山のセンサスは、1972年8月25日から9月22日まで34日間のあいだにおこなわれた。行列観察は、A・B・C3群について、それぞれ10回、11回、8回おこなうことができた。また、サンプル個体として、とくに1オのメスを中心に、新たにA群21頭、B群10頭、C群12頭の計43頭に入れずみをほどこした。センサス結果は第1

第1表 行列観察の記録

回数	A群	B群	C群
1	902	222	230
2	926	234	247
3	891	215	235
4	922	240	250
5	965	240*	215
6	932	245	239
7	913	226	246
8	792+α	236	247
9	909	260	
10	918	284	
11		239	

* 225+15 males

第2表 高崎山のサルの頭数と構成 (1972年9月)

	A♂(8才以上)	Y♂(5-7才)	A♀+Y♀	3-4才	2-1才	0才	計
A 群	45	45	290	140	290	150	960
B 群	25	30	75	30	70	40	270
C 群	20	10	80	40	60	40	250
計							1,480 (約 1,500)

表のとおりである。高崎山のサルの推定頭数は第2表のとおりである。Aは adult, Yは young を示す。センサス参加者は13名であった¹⁾。白山の調査は、1973年2月20日から3月11日まで行なった²⁾。今回は、群れの個体数の確認とともに、群れが沢を横切ったり、広いナバタ³⁾で採食しているときの群れの広がりなど、遊動時の群れのスペーシングの記載をおこなったが、表現法が困難なため整理がつかない。センサスと群れのトレースについて、今年度は次の2点をとくに追求したい。1) ジライ谷合流点より上流の蛇谷流域の群れの有無の確認とセンサス。2)しばしばその付近で群れを見失ってしまう、オオノマ、コミンジャ谷、丸石谷付近での確実な群れのトレース。

ニホンザルの寿命については、正常死亡年令、最長寿命、0才平均余命などを算出できるほどには資料が充分でない。野生群または餌づけ直後の群れ約30群より、大まかな構成を出してみたが、群れのサイズが10数頭から200頭近いものまでバラツキしていることや、地域差などもあって、自然状態の安定年令構成を知ることも困難であった。しかし、これらの検討は、ニホンザルに対する餌付けの影響を量的に知る上でも、個体群動態の分析の上でも必要であり、今年度は高崎山の資料を加えて、目安となる数値とモデルを出したい。

幸島のニホンザル群と森林植生⁴⁾

荻野 和彦 (京大・農)

ニホンザルの群れが、生息地の植生をエネルギー源として利用するとみたとき、どのていどのものを必要とす

るか。ニホンザルの群れと生息地の量的関係をあきらかにするため、幸島においてニホンザルの群れの植物の利用のしかた、ならびに利用される森林植生の特性について調査をおこなった。

ここでは、森林植生とサルの群れの関係を、単純な物質の流れの糸、一次生産者としての森林植物と消費者としてのサルの群れのみを考えることとする。またサルの群れは、そのエネルギー源として、森林植物にのみ依存しているものとする。そうして森林植物のもつ可給エネルギー量と、サルの群れの要求エネルギー量のバランスシートを描いてみる。

幸島の森林植生には、かなり人手がくわわっていることがみとめられる。これを概観してみると、島の裾をとりまくように岩石の裸出する部分があり、貧弱な海浜植生がみられる。ここにつづいて斜面の中部から、下部海に面するところにみられるのがトベラ林である。島の尾根の上部には、点々とイヌマキ林がのこっている。島の南に位置する高地、ミナミマキを中心に、北へのびる尾根と、西へのびる尾根にかこまれた、やや内陸的とよべるところには、タブ林がひろがっている。コドマリとオオダマリの沢沿いと、スギダイラには、アカメガシワ林がつづいている。スギダイラのアカメガシワ林は、スギ造林地の皆伐跡に成立した二次林であり、タブ林ではすくなくとも大正時代以来薪炭材の採取がおこなわれていたといい、事実いくつかの炭焼あとのこっている。

薪炭林として利用されつくしたタブ林、二次林として成立したアカメガシワ林、点状に残ったイヌマキ林、およびトベラ林が、ここでのサルの群れが利用しうる植生のすべてである。利用可能な植物量がどれほどあるかをきわめておおよざに推定するため、鹿児島県川内市のコジ林でおこなわれた調査から、現存量、生長量のデータをひろいあげてみると、幹 221 ton/ha、枝 82 ton/ha、葉 8.4 ton/ha であり、生長量は幹 5.7 ton/ha・yr、枝 2.6 ton/ha・yr、葉 0.16 ton/ha・yr である。葉の寿命が2年間であるとすれば、現存量のおよそ半分が当年の生産にかかるものとみることができる。このうちサルの採食しうるものは、比較的若い葉、小枝、果実であるから、葉の

¹⁾ 調査参加者：西邨顕達、大沢秀行、上原重男、佐藤俊、奥村良子、秦日出光、秦雄一、川合幸一、中野昭二、中谷京一、門脇幸造、二宮直夫。

²⁾ 共同調査で2月5日から2月27日まで伊沢紘生が、2月5日から3月12日まで佐藤俊が調査をおこなった。

³⁾ ナダレ道や、伐採跡などの高茎草原。ススキ・スタケなどサルの食物が多い。

⁴⁾ 木村光伸 (京大・農) との共同研究。